特253
122

學藝講座第四輯（十二月號）

滿蒙問題に就て

貴族院議員 男爵 井上清純

東京 學藝講座刊行會

342
179

始

特253
122

學藝講座刊行趣旨

明るく徹底した知識と理解、これが現代人の何物に對しても要求する所である。

そしてあらゆる文化を都鄙の區別なく然も最少の經費と最短の時日を以て如何に廣汎なる知識を會得するかにあるとは日常忙しき職務に遑ぎられてゐる多くの知識教育を探求される現代人の誰もが懷く希望である。

其希望に應じて生れ出でたのが本學藝講座にして文化の中心地に於ける一流名士の講演と論策よりその精華を採りその要を集めて系統的に組織立て然も平易にして理解易く特殊の問題に偏せず、政治、經濟、宗教、哲學、藝術、社會問題、等々！ 現代文化の最高標準たる學理の通俗化、專門知識の常識化によつて始めて我々の生活に卽した最も効果的に的確な知識を把握されて行くことを確信する。

斯くして此の權威ある思想に親炙せしめたいのが本講座の使命である。

希くば諸賢の一顧を賜ひ、此の趣旨に御贊助御入會あらむことを。

編者識

講座執筆者

世界經濟への發展	明治大學教授	赤神良讓氏
社會學	文理科大學教授	綿貫哲雄氏
德川時代に於ける社會思想	大正大學教授	宮崎榮雅氏
農村經濟	慶應大學教授法學博士	氣賀勘重氏
教育學	早稲田大學教授	稲毛詛風氏
哲學思潮	慶應大學教授文學博士	川合貞一氏
政治教育	早大教授政治學博士	高橋清吾氏
題未定	文理科大學講師	永野芳夫氏
工藝美術に就て	帝國大學教授工學博士	伊東忠太氏
農村の更生に就て	協調會參事前教務課長	惣田太郎吉氏
婦人問題	法政大學講師	市川房枝氏
日本政治史	日本大學講師	綾川武治氏
最近本邦に於ける勞働運動に就て	協調會參事勞働課長	町田辰次郎氏
題未定	大正大學教授	松浦一氏
國實の話	大正大學教授	脇本樂之軒氏

（尙依頼中の執筆者は逐號發表）

滿蒙問題に就て

井上清純

滿蒙問題と云つても、滿蒙問題は支那問題の一部であつて、更に世界的に考へて見なければ、支那の眞相を知りつくすことが出來ないと思ふから、もう少し大きな方面から考へて見たいと思ふ。

世界を三分して見ると、歐洲の方面はフランスの陸軍とイギリスの海軍に依つて、また西太平洋、東太平洋並に南北アメリカと云ふやうな地域は、合衆國の陸海軍に依つて各その治安は維持されてゐるのである。西太平洋と云ふと百八十度以西の海であつて、北はベーリング海峽から南はニュージーランド並に濠洲シンガポール迄も含んだところの廣大な海面であるが、この西太平洋並にアジヤの大部分は彼等に依つて維持されて居るのではない。また支那の陸海軍やロシアの陸海軍に依つて維持されてゐるのでもない。

即ち我國は世界を三分して、その一たる大きな地域の治安維持に任ずる義務を有つてゐるのである。この天職たるや我建國の精神に合致したものであつて、三千年の永い間この島國の中に於て、種々なる文化を吸收し、こゝに理想の文明を打立てんと、吾々の祖先並に吾々の同僚はやつて來た。それが今日こゝに現れてゐるのである。この建國の理想は明治三十七八年の戰役に於て、始めてその一端が顯現されたものであつて、その結果としては朝鮮並に滿洲に

於て、大きな楔が打ちこまれたのである。即ちアジアの文明は誰に依つて保護されるのであるか、アジアの莫大な富は誰に依つて擁護されるのであるか、言ふ迄もなく我國が太平洋の波濤の一たんに立つてゐるからである。

この天職の一端として得たるところの朝鮮並に滿洲は、その後穩健なる發達を遂げつゝあつたのであるが、歐洲戰を一期として我國民精神に改廢を來し、世界の思想も亦國際平和心理に依つて左右され、久しくこの地域が我國民の周圍の外に置かれてしまつたのである。この重要なるところの地域が何故に斯の如く等閑に附せられたのであらうか、これは吾々國民として今更に後悔を禁ずる能はざるものがある。

○

支那は始終動亂革命を起してゐるが、支那は果して國家であるか、民族の集團であるか、分けの解らぬところの國家である。この意味合に於て「支那とは何ぞや」と云ふ大きな疑問を世界に投げかけてゐるのである。そこで、この支那の疑問を解かずんば滿蒙の問題が分らないのである。

支那は清朝の亡びると共に亡んでしまつた國で、爾來何をやつて居つたのかと端的に言つたならば、彼等は自分の國を毎日亡しつゝあつたのである。即ち軍閥が四方に峰起した。これを日本の歴史に就て考へて見るならば、恰も應仁の亂と云ふものが、稍々髣髴するものがあるかと思ふ。熟知の如く應仁の亂は京都を中心にして、東の陣、西の陣――山名、細川と云ふものがあつて戰ひをしたのであるが、目的は茫莫たるものであつて、その十一年間の戰ひと云ふものは、たゞ京都の文化を破壞するに過ぎなかつたのである。この支那の清朝革命後は、全くこの應仁の亂と

同じやうに無意義の戰ひを常に繰返して居つたために、根底から支那の文化は破壞され、產業も亦破壞されてしまつたのである。

そこで大正十五年七月蔣介石が北伐をしたのであるが、そのときに如何なる旗印を揭げたかと云ふに、彼等は國內に於ては國內の統一、軍閥の打破、國外に於ては帝國主義の打倒、不平等條約の撤廢と云ふものを旗印として、北閥に出かけた彼等は、二ケ年と云ふ僅かの年月に於て支那と云ふ國を統一したのであるが、これは武力でも何でもなくこのモットーと宣傳に依つて贏ち得たのである。その宣傳は、最初に於てはプロージンと云ふロシア人を參謀として悉くソヴイツト政府のやり方通り、共產主義政府をつくり上げたのである。その後プロージンを追ひ出し、國民政府と云ふものが出來たが、國民政府のモットーたるところの三民主義並にその制度は悉く第三インターナショナル或はソヴイツト政府と少しも變らないところの制度を採つたものである。然らばこの三民主義と云ふのはどう云ふことであるか、云ふ迄もなく、民政主義、民權主義、民族主義であるが、民政主義は暫く問はないで、民權主義と云ふのは如何なることかと云ふと、普通ならデモクラシーであるが、普通のデモクラシーではなく、平等を指して民權主義と言ふのである。即ち親子の境、子弟の境、男女の境、君臣の境、神佛の境、神佛と人との境と云ふやうなものを悉くとり去つてしまつて、一切を平等にすると云ふことであるから、共產主義と少しも變る所がない。從つて道德は根底から破壞されてしまつたその結果は、孔子の廟は悉く破壞され、古寺は破壞され、五千人も居つた米國の宣敎師は三千五百名までが逃げ出し、更に殘りの千五百名も逃げ出しつゝあると云ふ狀況である。で、支那人は全く赤裸々の野

蠻人に歸つてしまつたと言ふべきである。

○

更に民族主義と云ふのは、民族解放運動から起つたものであるけれども、單なる民族解放運動ではなく、ジュンギスカン時代に歸つた民族主義である。然らばジュンギスカン時代の領土はどう云ふ領土であつたか、日本に攻めて來たところの蒙古襲撃、あの蒙古襲來の時の領土であつて、即ち日本から朝鮮、台灣、琉球、壹岐、對島までもとらなければ、日本と平和なる交際はしないと云ふのが民族主義なのである。

この主義から帝國主義打倒と云ふことも出來、また打倒日本と云ふ言葉が現れて來たのである。この打倒日本と云ふことが、單なる言葉の上の綾ではなくして、斯の如く三民主義と云ふ國民政府のモットーたるところの主義から胚胎したものであるから、その根據は最も深いものがある。即ち國民政府の立つてゐる間は、日本から朝鮮、臺灣、琉球、壹岐、對島を奪ふにあらずんば、日本と親善を結ばぬと云ふことで、またそれを旗印に掲げて立つた國である。

一体支那の現狀はどうかと云ふと、前述したやうに我應仁の亂と同じやうな後を承けて、革命政府が現れ、而して一時は統一したやうに觀られるが、内容は少しも行き屆いて居らない——まるで亂民の巣窟であつて、手も足もつけられないやうな有樣だ。從つて到底文化人の住むことの出來ないやうなところになつてゐるのである。そこで失業者は幾らあるかと云ふに、人口四億萬人の十分の一即ち四千萬人と云ふ大きな數にのぼつて、丁度日本内地の全人口に

匹敵するやうな大人口が自給自足をなし得ず、犬猫同樣の生活を送つてゐるのである。

その最後に何がやつて來たかと云ふと、過般の大洪水である。この大洪水のために一千五百萬人の罹災民——關東の大震火災の罹災民などは話にもならない非常な多數なものである。これは支那人に言はせると、救ふことの出來ないものであり、また十年乃至二十年には必ず一度は襲つて來るものであるから、天災として諦めて居る。斯樣な譯で未だ曾て救はれた歴史はないのである。

○

甚だ恐れ多い話であるが、當時御見舞として我　陛下からの御下賜金は、斯うした方面には行かなかつたと云ふことを支那人自身が言つてゐる。實に許すべからざるやり方であるが、蔣介石の——國民政府は今や全く財政の破綻に頻してゐるので御下賜金は軍事の方面に向けられ、或は蔣介石のポケットに入つてしまつたのであらうと云ふことを上海邊りでは噂をしてゐるのである。

吾々が熱血を罩めて送つたところの贈物も——救濟品も、事變が起らなかつたならば、そのまゝ受取つて恐らくは欠乏してゐる軍需品の方に廻はしてしまふのであつたらうと云ふことを、これまた支那人自身が言つてゐるのである。然るに滿洲事變が起つたのを理由に罹災民が揚子江の淵に屍々累々としてゐるに拘らず、そのまゝ我誠意熱血を罩めて送つた救濟品を突き返すと云ふ遣り方であるから、支那は自國の國民が如何に困苦しても構はぬ國である。詰り政府と國民とは全く緣がない。斯う云ふ事實を我々か先づ第一に考慮に置かないと、支那と云ふことを話し兼ねる

のである。

斯う云ふ狀態であるから滿蒙は別にどうかしなければならぬが、假に支那から滿蒙だけを切離したとしても、支那本土には、間もなく諸所方々に暴動の起る趨勢にあることは明かだ。それでこの情勢に處して我帝國は如何なる覺悟をもたなければならぬか。滿蒙を片付けても支那本土の問題はこのまゝ放任は出來ないのである。若し放任して置けば、東洋の平和を維持する日本國として、その天職を拋つものであつて、一度び拋つたならば最後、日本は太平洋の波濤の中に沈んでしまふのである。

○

そこに大きな問題がある。我權益となつて以來政策その宜敷を得て日に隆えつゝあつた滿蒙は、張學良が一度び青天白日旗を揭げると即ち國民政府と提携するや否や、國民政府の三民主義がそのまゝ滿蒙の地に移つて來たのである而して國民黨の黨部員がどの位居るかと云ふと、僅に四十萬人位のもので、その內實權を得てゐる者が半數に過ぎない。それ等の少數の者に支那四億の民は、殆んど苦みのドン底に陷つてゐるのであるが、これは少しもロシアと變る所がない。

この生殺與奪の權を握つて居るところの國民黨が、黨部員と云ふものを滿洲に送つて、さうして如何なることをやつたかと云ふと、主として排日排貨と云ふことに就て、極端に張學良を支持したのである。張作霖は日本に受けた恩を忘れたがために、遂に誰がやつたかと云ふことは知る由もないが、爆死の運命に遭遇した。

併し彼は事實は日本のために自分が立つてゐると云ふことを意識して居つたものであるが、張學良は張作霖とは殊更に違つてアメリカに男立つて、その周圍にはアメリカ出身のボーイのみ近づけてゐるために、背後に日本あつて立つてゐる所以を知らないから、蔣介石と握手をして、三民主義の政策をそのまゝ滿蒙に行ひかけたことは、張學良の時代になつて最も顯著に現れて來たのである。即ちその第一回は濟南出兵當時頃からであるが、よく日本の政府並に國民がこの事實を体驗して、事前に於てこれを處理して行つたならばこゝまでは來なかつたと思ふのであるが、成るべく日本は穩便に事を運ばう、國際協調のためには支那を弟のやうに導いて行かなければならぬと云ふ、寛容の態度を以て支那に臨み、世界に臨んで來た結果、彼等は少しも日本の好意的態度を解しないのみならず、恩に報ゆるに仇を以てすと云ふ即ち排日排貨、打倒日本と云ふ愚劣極まつたモットーを揭げて、盛んに日本人を徹底的に滿蒙から驅逐せんと企圖したのである。この事實は豫知し豫期してはゐたが、この度私が滿蒙の地を視察して更に驚いた次第である。

○

即ち彼等のために虐げられて居つた吾々の同胞は幾らあつたか、一々例證するに枚擧に遑はないが、今二三の例を申したならば、今迄數千萬も投資して二十年も經營して居つたところの或る鑛山の如きは、支那はそれをどうかして奪ひたいと云ふ計畫の下に、凡ゆる惡稅を我に課けた。併しそれ位には忍耐して來たところ、今度はその職工を脅迫して、言ふ事を肯かぬ者に對しては官憲の力で陷れ、それでも尙ほ肯かぬ者に對しては軍隊の力で以て殺害すると云

ふ事實である。だから日本はこれに對して帝國主義武力を用ひて、彼等支那官憲を追ひ拂ふにあらずんば、個人としても會社としても國家としても經營は出來ないのである。

甚しきに至つては個人の商店では物を賣ることが出來ぬやうになつた。即ち日本人の店に行つて買ふ者は、途中で待ち伏せして危害を加へるのだから、店を――商賣をやめるの外がない。すると、今度はその商店を表から釘付けにして、三度の食事すらも出來ないやうにしてしまつたのである。

これは想像の問題でなく事實の問題である。更に甚しきに至つては、在留民に對する暴虐侮辱はまだしも、滿鐵沿線の警備の任に當つてゐる我兵隊にまで、種々なる侮辱を與へるに至つた。即ち兵隊の目の前で線路に石を積んで列車の顚覆を圖る。それをとめれば寄つてたかつて兵隊を袋叩きにする。或は日本の兵隊に向つて「お前達の持つてゐる銃は實に古々しい。吾々のはこんな新式だ。お前達は明治三十七八年戰役以來戰爭の經驗はあるまい。吾々が若し戰つたならば日本なんかはメチヤクチヤだよ」なぞと云ふ罵詈を浴びせられながら、今日迄隱忍に隱忍して居つたのである。

吾々としてもよくもあれだけこらへてゐたものであると思はない譯には參らないのである。

私は奉天に行き北大營の兵營を視たが、その各室の壁々には何れも「打倒日本精神教育」と云ふことが貼つてあつた。彼等は日本人を滿洲の野から追ひ拂はんとし、毎夜の如くその教育を軍隊に授けたのである。一方小學校の生徒には、學科教育に入る前には必ず「打倒日本」と云ふことを三度び稱へさして居る。また小學校は勿論各學校の教

科書には排日の精神が織込まれてゐるのであるが、これは單に修身とか讀方の教科書のみならず、地理、歷史の教科書に於てもさうである。殊に甚しいのは算術の教科書に於ては、例へば日清戰役に日本軍が幾ら死んで支那兵が幾ら死んだ、何れが多く死んだか、誰のために殺されたかと云ふやうな問題が事實あるのである。斯樣に無邪氣な子供から排日思想を培養されてゐるのだから、日本人と見れば唾を吐きかける。殊に事變間際には支那の子供や婦人達が一團となつて、日本人に向つて唾をひつかけると云ふ傍若無人振り發揮してゐたのである。從つて日本の小學生などは至るところに於て侮辱を與へられるから、通學することも出來ない有樣であつた。

○

以上の例は滿洲事變前の實狀の一片であるが、これ迄上海でも、青島でも、北京でも、天津でも、奉天でも至る所に於て右樣の侮辱を同胞が受けつゝあつたのである。そこで同地方の在留民は極度に憤激し、これを日本の外交官に申し出で、その抗議方を要求したのであるが、領事館の抗議は「暖簾に腕押し」の態で何等の効を奏しなかつたのである。斯う云ふ譯だから、張學良などは自ら極端に日本を侮蔑し、そして日本はアメリカには絕對頭が上らない、國際聯盟には斷じて膝を屈するのだ。と云ふやうな考を抱いてゐたのである。

そこで滿蒙地方の居留民は斯う云ふことを言つて居る。斯の如く吾々居留民が虐げられて居るのだから、故國の新聞が何かしら傳へて呉れさうなものだ、少しも傳へて呉れないのは不思議だ、おかしい、今度こそは傳へて呉れたらうと思つて內地の新聞を待ち遠しく開いて見ると、スポーツや飛行機のことなどは、全紙面を擧げて大きく取扱つて

るるが、滿蒙問題に關しては言ひ譯的に小さく隅つこの方に出てゐるのを見て、大いに憤慨して新聞を裂いたと云ふことである。

それからこれは支那人から聽いたことだが、支那人は日本の政界の推移を常に注視してゐる。最も彼等の目に映つたのは日本共産黨のことである。支那人の言ふには、國家を亡さうと云ふやうな人があるならば、支那の政府でもロシアの政府でも直ぐ殺して仕舞ふ。然るに日本の共産黨の裁判を見ると、まるで何か相談事でもしてゐるかのやうに見える——大學の講座でも開いてゐるかの感がある。斯う云ふことを彼等は深く感得してゐたのであらう。が、この事は日本の思想や政界が腐敗墮落してゐることを言つたものである。即ち日本をやつつけるならば今だ、日本は戰爭する氣力もなければ、またその意思もない、好機逸すべからずだと云ふことで、我滿鐵の線路(柳條溝と云ふところ)を破壞した。後に至つて北大營の中から燒殘つた書類を發見したが、それを見ると十九日午前二時を期して、非常召集令を發したことが分る。併し、その以前から戰備は怠りなく進めてゐたことは言ふ迄もない。同地方には日本人(日本軍隊と居留民とを併せて)が僅かに六百名しか居らなかつたので、恐らくは皆殺しにする積りらしかつたのであるが、實に天佑とも言ふべく、我陸軍では、いつなん時さう云ふことが起らぬとも限らぬ空氣を察知してゐたので、夜間演習のみをして、萬一のために備へてゐたのである。また滿鐵沿線に於ける我軍は僅かに一萬三千人である。

○

然るに張學良の軍隊は三十萬である。この大軍を向ふに廻はして戰ふ力がなかつたならば、我居留民と共に守備兵

は皆殺しにされてしまふ。今や支那には恐るべき所の小銃大砲その他凡ゆる新式、精鋭な武器が備はつてゐる。後に私も北大營の兵器廠に行つて見たが、そこには恐るべき所の毒ガスを製造して居つた。また恐るべき所の小銃、大砲の彈丸彈藥は山の如く積まれてあつた。更に飛行機の格納庫には、無慮百臺に近い新式な飛行機が列んで居つたが、もしも是等の兵器が活用され、三十萬の軍隊が命を的にして日本に向つて來た場合には、如何に日本兵强しと雖も如何に日本人に大和魂ありと雖も、日本の兵隊と言はず、居留民と言はず、恐らくは一人も殘らず皆殺しにされたものと思ふ。然るに實に天佑であつて、その前の晩——十八日の午後十時半に北大營の戰ひが起つた。張學良の精兵は一萬五千の兵數ではあつたが、支那の兵營は一の要塞である。後に行つて見たが、外廓の外には大きな塹濠が設けてあつた。營内には大きな練兵場があつて、そこには張學良が觀兵式を行つた所もある。その他種々なる防禦陣地を設けて、精兵を——最も優秀な兵隊を擁して居たのであるが、我軍の勇敢なる行動に依つて十九日朝の五時半には全部これを擊破した。これが滿洲事變の最初の戰ひである。

ところが今度の視察で感嘆したことは、是等の軍隊が少しも誇る色もなく、苦しい任務に就いてゐたことである。さうして兵隊が少いのであるから、これから吉林に行く、長春に歸る、今度は百哩も離れたどこ〳〵迄進軍したと云ふやうに、全く不眠不休、東奔西走とはあのことでなくて何であらう。それで吾々の如き緩慢なる旅行をしてゐる者には相濟まぬと云ふ氣が痛切に起つた。

ところで、九月十九日午前五時には北大營を占據した我軍が、とう〳〵と昇る旭に向つて皇國の萬歳を稱へたので

あつた。そのときに我軍の背後から君が代の奏樂が流れて來たので、これは不思議だな――と振り返つて見ると、遙げ遲れた支那軍樂隊が、最後のドダン場に智慧を絞つて奏したのがこの君が代である。と云ふ事實を直接軍人諸氏から聞かされたのであるが、これを以ても支那國民の如何なるものであるかと云ふことが推して知ることが出來よう。尤も我軍はこれを構はずに追放したと云ふことであるが、誠に噴飯事にも思へよう。

斯う云ふやうな戰端が開始され、いよ〳〵戰雲急なるを告げたので、關東軍司令官は速座に緊急召集をして、旅順より奉天に進出し、後は朝鮮軍に任すと云ふ獨斷專行をなしたことも亦機宜の處置であり、果敢なる行動であつたと私共は思ふ。私が京城に入つた時には丁度その時分であつた。次いで二十一日の午後には、朝鮮軍も亦獨斷を以て混成旅團を編成し、奉天方面に進出したのであるが、これまた機宜の處置であると言はざるを得ない。

○

斯の如く東奔西走して居る兵隊を、私は吉林に於て、九月二十五日であつたが、そのとき雪交りの雨が降つてゐるので、つらいであらうと尋ねて見ると、未だ一回もお湯に入らないので、それが何よりつらいと云ふことだつた。それから足を余りかいてゐるのでどうしたのかと聞いて見ると、どうも長い間脚絆をとかないものだから、ムシがわいたのだと云ふことであつた。傷病兵も見舞つたが、何か希望がないかと云ふことを申したところが、希望はないが、吾々が戰ふときは僅かに二百名だつた、吾々はお國のため、東洋平和のため、大なる使命のために來てゐるのだ。若し吾々が今こゝを撤退したならば、後に殘つた居留民はひどい目に遭はされることは知り切つてゐる。斯んなこ

とがあつては死んでも死に切れない、どうか吾々をして犬死に終らして下さるな。この事だけを國民に知らしてくれと云ふ傳言であつたのである。

ところで、吉林から長春に行く間に一人のドイツの商人と乘り合せた。その商人の言ふのには、ドイツと云ふ國は今から十七年前に於てモロッコ事變があつた。當然これは、ドイツが勝つべき筋合ひのものであつたが、英國その他から二千萬圓の金が來て、ドイツの新聞は悉く買收されたために戰機を失つてしまつた。然るに間もなく歐洲戰爭が勃發して、ドイツは各國から袋叩きにされた結果、今日ドイツは乞食の群に入つてしまつた。苛めな狀態に陷つてしまつた。日本は今五六年このまゝで居つたならばどうなるか、ロシアの五ケ年計畫――これは產業の方面に於ては大した成果は齎さぬけれども、軍事上に於ては相當の成果を齎しつゝあるから、恐るべき陸軍がこゝに現れて來る。支那の陸軍と雖も、今盛んに各國の兵器を買ひ込んでゐるから、これまた新式の近代化した陸軍が現れて來る。

米國の海軍はロンドン條約の結果、西太平洋の征海權を彼等が握る時代が來るであらう。斯の如きに於てはこのロシアや支那や米國のために、日本が袋叩きにされるかも知れない。然るに未だロシアの五ケ年計畫は完成してゐないまたロンドン條約も實行されてゐない中に、滿洲事變と云ふものが勃發した。その機を逸せず關東軍が勇敢なる行動を起して、僅かに一萬數千人の兵を以てして、三十萬の大兵を滿鐵沿線から追つ拂つたと云ふことを見て、ドイツ帝國は双手を擧げて喜ばない譯にはいかない。

で、奉天に居るところの關東軍司令官に向つて、早速祝辭を送つた。それから彼の歐洲戰爭に於て、ドイツ軍隊は

二十四時間の中に各國に侵入し、敵軍を崩壞せしめた。あのドイツ軍隊の機敏果敢な行動は、ドイツ人にして始めて出來ることであると思つた。然るに今日滿蒙の野に於て、日本軍の行動を見るに、ドイツ以上の働きである。吾々は舌を捲いて感嘆したのである。と言ふことを眞目面に語られたのである。

○

更にドイツ商人が言葉を續けて言ふのには、凡そ支那の政治家と云ふものは、少しも文化的施設を行はない。國利民福と云ふことは毛頭考へない。たゞ自分の懐を肥さんがために民を絞ることをのみ考へてゐる。また他國の人間に對しても同じだ。これは人類文化の敵と言はなければならぬ。一體支那人は近代文化を建設するのに、餘りに自惚れ過ぎてゐる。支那人は生れながらにしてろうしであるから、再びこの國が近代文化を建設してどうすると云ふやうな望みは持つてゐない。然るに日本人は國は古くても、心はみな若々しく新しい。老年になつてもさうだから將來あるる國民である。

即ち全世界に於て將來ある國民はドイツの國民と日本の國民だけである。ロシアの國にある共産主義と云ふものを除いてしまはないと、世界の平和——不安を除去することは出來ない。昔はドイツは共産主義のやうな理想を行はれるものだと考へて居るものもあつた。併し今日に於ては、さう云ふ考を持つてゐる國は、たゞロシア一國のみである。即ち共産主義などの政治や制度が實行され得べきものでないと云ふことを、痛切に感じてゐる譯である。

そこでドイツはこれを西から攻めて行くから、日本は東からこれを攻めて行つて、さうしてあの虐げられたロシア

の人を救つて貰ひたい。それにはハルビンをどうかしなければならぬではないか——なぜ日本人がハルビンに手をつけないかと云ふことを申して居つた。これ等のことはその人一個人の說であつて、ドイツ全體がさうだと肯定し得るものでないことは勿論であるが、このドイツ商人の言葉たるや誠に意味深いものがあると考察した次第である。

そのハルビンと云ふ所は、私も政治的に見て、思想的に見て、軍事的に見て、或は産業上から見て、その他諸般の點に於て、事實日本にとつては大事なところである。ところが今回圖らずも、ハルビンより遙か北方の地點——奈來迄皇軍が押し進んだので、ハルビンは日本の權益内に自然に入つてしまつた譯だが、實に巧妙なる戰略と云ふか、天佑であると私は思ふ。斯う云ふやうに、神の助けと云ふものは數々起つてゐるが、一々それを例證すると話が長くなるから述べないが、今度の戰ひには奇蹟的のことが非常に多い。而してそのために我軍の勇氣付けられた點があるさう云ふ正義の戰ひには必ず神と云はうか、奇蹟と云はうか、天佑的のことが多いのである。

○

支那軍閥が滿蒙地方の住民に如何なる重稅を負はしめたかと云ふと、普通の苛斂誅求ではないのである。また滿洲の生産品を陸軍や海軍で凡て高く買ふと稱し、强制的に一手に買ひ上げてゐるのである。その買ひ方たるや多くの不換紙幣を亂發して買ふのであるから、五圓で買ひ上げたものは一圓五十錢位に値が下つてゐる。さう云ふ工合で幾ら住民が働いても骨までシャブられてゐる有樣である。で、同地方の商人は次々と破滅してゐる。一體彼等は何がために人民を苦めるかと云ふと、三十萬の軍隊を養ふがためにするのである。そこで支那の人民は決して政府を政府と思

はないで官賊か官匪と思つてゐる。政府の連中が暴力を以て人民を搾取するのであるから、是非軍隊を持たなければならぬ所以であるが、その代り人民は絞られ通し絞られることは前にも述べた通りである。從つてその軍隊なるものは國防とか何とかの有益なものにならないことは言ふ迄もない。

支那の敗殘兵は兵匪であり、また馬賊であり土匪である。それで今度敗殘兵をこのまゝうつちやつて置けば如何なる結果を招來するかも知れないと、馬占山軍を泰來まで追擊したのはこのためであらう。支那の軍隊は戰ひに敗ければ賊となつて働くのであるから、到底治安の維持は出來ないことは言ふ迄もない。そこで支那人も僅か一萬三千の日本軍に三十萬の支那軍が敗けるやうでは……と今迄重稅に重稅を課せられた彼等としては、その意氣地なしにこりこりしてゐると云ふことである。

兎に角東洋平和のため、我權益保存維持のため、吾々が一生涯に於て體驗することも出來ない、零下三十何度と云ふ極寒の滿洲の野に於て、働いてゐる軍隊に對しては心から敬意を表するものである。

馬占山軍は極寒の夜でもあるから、一休みしようとしてゐるところを皇軍に夜襲されたのだから、狼狽して逃げ出してしまつた。で我軍は飛行機で彼——馬占山の乘れる鋼鐵列車を追ふて爆彈を投下したるも、不幸にして爆發しなかつた。

寒さのことを今述べたが、凍傷にかゝつて癒らないものは、手足の手術を要するやうなことになるかも知れない。斯う云ふ人々に對しては、如何に東洋平和のため、如何に御國のためとは云へ氣の毒の感に打たれる。併し我軍隊の

勇氣のある事、殊に我が小數兵員を以て馬占山軍の大軍を追つ拂つたと云ふやうなことは、奉天に在留中の外國武官などは、此の報を聽いてふるひ上つたと云ふことだ。

○

今度の戰爭にロシアの軍隊が策動したことは、確證が上つてゐることだから、これは何人と雖も否定出來ない事實である。併し我軍はそれに恐れるやうなことは更にない。そこで今日ロシアの東支鐵道を破壞しても、また間違つて破壞したとしても、彼等は對抗する力がないと云ふ見當である。これは私は昨今正確なる方面から聽いたのだが、私もさう考へる。だから國民はその點は何等心配する必要はない。

また國際方面から最後の手段として、日本を經濟的に苦めやうとして、米國の力を借りることになつても、米國もさるものであるから、自分は單獨にあたらずさわらずと云ふやうな態度をとつてゐる。

けれどもいよ〳〵米國が日本を攻略しなければならぬと云ふやうな必要があつた場合には、アメリカの全艦隊、即ち四百艘が總出動しなければならぬから、戰爭中のアメリカの貿易は悉く他國の船に俟たなければならぬ。戰費は幾らかゝるか想像することは出來ないが、假に十數億萬圓をかけて全艦隊を出動して日本に當つて來たとしても、日本はこれを太平洋の波濤の中に沈沒させる——擊破する力と自信を有つてゐるのである。

即ち我國の軍隊は伊達に刀をさしてゐるのではなく、陸海軍共に精鋭なものである。今迄は日本人が自分の力を知らなかつたのであるが、今や眞の日本國と云ふものゝ輝くべきときが來たのである。この狀勢をアメリカがよく知つ

てゐるから、アメリカは我國に對して戰爭をしかける國でもない。また日本を攻めて何の利益もないのである。

そこで經濟封鎖であるが、これもドイツなどなら出來ようが、神の定めた大八洲を世界の力で以て、經濟封鎖などは出來るものではない。今迄日本人は日本の國は自給自足の出來ぬものと思つて居つたのであるが、これが完全に出來ると云ふことを悟つて喜ぶべき日が來たのである。

世界に國を成して日本位に戰略的好位地を占めてゐる國は未だ他にないのである。即ち難攻不落の金城蕩地とも云ふ實に神の國と言はなければならぬ。然も日本の今度の主張は天神地祇に向つても恥ずることのない、正々堂々たる主張であつて、目的はアジアの文化を擁護し、アジアの人類を救ふと云ふ大理想であるから、戰ふにしても氣持ちよいところの戰ひであるから、國民は一齊に起つてこの征戰に從軍すべき秋がきたのである。今や大日本帝國は白人文明を向ふに廻はして、アジアの文化を輝かすべきときがきたのである。

○

歐洲は餘りに錯綜し、大小の國が分立してゐるために、殊に戰後の疲れは未だに癒えず、產業に、政治に、經濟に財政に、凡ゆる方面に互つて復活の曙光が未だ見られないのである。殊に今まで世界の金融の大中心であつたところの大英帝國が、財的に破綻したことに依つても、歐洲全體の狀況を略〻窺知することが出來ると思ふのである。

そこでヨーロッパの文化が西山に太陽が沒する如く沈まんとしつゝあるに反し、東邦日本のこの隆々たる有樣を見て、彼等は一抹の不安を感じない譯にはいかぬのであらう。だから、彼等としては——西洋としては、日本を敵にし

ては何事もなし得ないことを、十も二十も承知してゐる。併しながらこの日本一人が悠々としてゐるのをだまつて見てゐることは、イギリスとしてもアメリカとしても堪え得られないから、國際聯盟などで十三對一と云ふやうなおどかしをしたであらうことは明かだ。

國際聯盟とは何ぞや、これこそ大きな疑問であるが、これを端的に申したならば、歐洲の大戰を再び敢てするやうなことなく——導かぬやうに出來たものだ。即ちベルサイユ條約と云ふのが締結されたが、そのベルサイユ條約を破壞しないやうに抑へる機關と見て差支へない。だからこれは歐洲の聯盟であつて、眞の國際聯盟と云ふことは出來ない。換言すれば、國際聯盟は歐洲の覇權を握つてゐるところのフランスが、ドイツを壓迫するための機關に過ぎないものである。而して國際聯盟は未だ曾て平和的に貢獻したことは一つもない。

即ちルール戰爭のときに於ても、これに對して一言半句も容喙することを得なかつたのを初めとして、そんな例は一にしてとゞまらないことは世界人の認めてゐる所である。

○

我國は今日まで大なる犧牲を拂つて國際聯盟のために費した金は二千萬圓にも達するであらう。然るに支那は一文も支拂つてゐなかつたのを、漸くこの頃に至つて三分の一を納めたので、漸く顏を出せた譯である。ところで支那の或る公使の如きは支那生れでなく、どこか他所の國で生れたものだから、横文字は書くが縱の漢文を讀むことの出來ないといふ、モダーンボーイである。一體支那にはそんな部類の人が澤山ゐるが、その公使の如きは今度起つた錦州

事件のときに錦州とはどこかと云ふことを訊いたと云ふ事實である。

そんなことを言つてゐる彼等の言を採り上げる聯盟ではない筈だが、先程も言つたやうに、歐洲文化擁護のための機關であるから、勝手放題なことをするのも當然なことであらう。それにしても支那は誰のために聯盟に入つたか、これは芳澤大使が承諾の判を捺したから入つたので、芳澤大使が判を捺さなかつたら入れなかつたのだから、餘計なことをやつたやうに見えるが、日本としてはどこ迄も協調主義を發揮し、成るべく聯盟の顏を立てるやうにやつたからである。入つたのは仕方ないとして、入つたならば一體聯盟の精神と云ふものは何にあるかと云ふことを知らなければならぬ。即ち組織ある國家と云ふことが第一で、第二には條約を尊重すると云ふことであるから、支那の如く條約も尊重せず、組織ある國家でないものは、聯盟としては斷然除名するのが當然の責務でなければならない。

然るにそれをすることなくして、支那の惡宣傳を眞に受けて日本を經濟的に世界各國で苦しめようとか、或は武力を以て日本を攻めようなどゝ云ふことを、彼等聯盟の口より出すに至つては、實に言語同斷の限りであつて、最早聯盟の價値は爪の垢ほども認めることは出來ない。

併し吾々日本國民は、若し彼等が經濟を封鎖し、武力で以て攻めて來ても、一向に恐れることはないと思ふ。即ち經濟を封鎖するとせば、支那は日本の海軍で以て忽ち封鎖されてしまふ。地球上の資源はどこにあるかと云ふと、西太平洋に全部あるのである。征海權は日本の海軍が持つてゐるのであるから、この資源をどうすることも出來ない。日本を苦めようとする彼等――ヨーロッパやアメリカは、自ら財的に破綻を來すであらう。即ち彼等は一ヶ年に三十

數億萬の損害を受けなければならぬのだから、日本を經濟的にも武力的にも苦めんとすることは出來ない。

○

今や武力に於ても經濟的に於ても、亦正義の觀念に於ても、指一本を指すことの出來ない實にオールマイティーの日本國家であつたと云ふことを、國民と共に世界の人が始めてこゝに認めたのである。

今や支那は遠からず崩壞の時機に遭遇してゐる。この秋に當り他の國では何も手を出すことが出來ないのだから、日本はこれをどうかしなければならぬ。即ち支那四億の民を救つてやらなければならない。それは何に依つてやるかは別として、今の南京政府の存在する限りは、支那問題も滿蒙の問題も決して片付くものではない。

そこで我國は君民一致してやるにあらずんば、東洋の文化を復活することは出來ない。從つてそれが出來なかつたならば世界の文化を救ふことが出來ない。

今や帝國は凡ゆる方面から非常に大きなる使命を背負はなければならぬ位地に立たされてゐるのである。果してこの重任を背負ふだけの力と勇氣があるか。吾々大和民族は一齊に立つて征戰の本土に從軍する力と勇氣を持たなければならぬ。さうして吾々の同胞は既に彼の滿蒙の野に於て、血を流し、骨を削つてゐることを知らなければならぬ。以て後に殘つた吾々國民は相共にこの强固なる精神の下に自分の業に勵み、我國體の如何なるものであるかと云ふことを、世界に知らしめなければならぬ。これが歐洲文明を救ひ、アジアの文明を救ひ、また虐げられたる支那四億の民を救ふ所以である。

道蒙問題に就て

私は繰返して要望してやまないのは、今や我國は國家存亡の岐路に立つてゐる秋であるから、國民は一大覺悟を決せられんことを祈るものである。

次號豫告

江戸の鑿井

三田村鳶魚氏

昭和六年度既刊

第一輯	宗教々育	大正大學教授	二宮守人氏
	東洋文化の特色	早稲田大學教授	武田豐四郎氏
第二輯	子供のやうな眼と心で		倉田百三氏
	日本民族の平和思想	神道本局管長東洋大學講師	神崎一作氏
第三輯	北歐文學に就て	東洋大學教授	三木春雄氏
第四輯	滿蒙問題に就て	貴族院議員男爵	井上清純氏

◇會報發行に就て（原稿募集）

一、會員親睦の機關として隔月毎（第一號は第五輯添付發行）に菊版八頁のものを發行致します。

一、會員名簿。

一、隨筆、感想、本會に對する希望、通信、時事談叢等々。

一、誌上匿名は差支へなきも用紙には住所氏名御明記のこと。

一、字　數……六百字以内

一、締　切……十二月十五日

東京市下谷區上野櫻木町九

宛名　學藝講座刊行會　宛

編輯後記

○

時局問題に就て何か特殊なものを編輯して欲しいと云ふ會員からの希望がありましたので、現下事變の中心地たる滿洲事情と發展極まりない世界時局の進展に際し、特に貴族院の論客井上男の論說を賜はりました。

男はこの度滿洲事變勃發するや、同事件視察員として貴族院より派遣され具に彼の地全滿洲に踏査し實情を正確に蒐め、滿洲問題の眞相を闡明せられた、歸朝後の第一聲であります。

○

尙井上男の論說を賜はるに際し前橋庄三郎氏の御厚意を深謝致します。

○

本號には會報添附の約束でしたが、編輯の都合で一月號に延期致しました。御寄稿の方々へ深くお詫致します。

○

多事多難な昭和六年も遂に、聞く師走の聲、諸賢の多幸なる越年を祈ります。今井

學藝講座會員規定

內容體裁　菊版九ポイント一段組上質美裝、二十四頁內外

頒布方法　會員組織とし會員に限り頒布し分冊賣は致しません。昭和六年九月一日より每月一回一日發行（一冊讀切）

入會方法　入會申込は六ヶ月分以上の會費前納に願ひます。但し中途解約者へは既納會費は拂戻し致しません。

會費　半ヶ年九十錢、一ヶ年一圓八十錢全十二冊（送料本會負擔）。

拂込方法　振替口座東京七三八九二番を御利用下さい。

東京市下谷區上野櫻木町見明院內
發行所　學藝講座刊行會
振替東京七三八九二番

昭和六年十二月三日印刷納本
昭和六年十二月六日發行

編輯兼發行人　東京市下谷區上野櫻木町九　今井祐申

印刷人　東京市外日暮里元金杉一九二　中尾濟

印刷部　東京市外日暮里元金杉一九二　中央印刷所

發行所　東京市下谷區上野櫻木町見明院內　學藝講座刊行會　振替東京七三八九二番

終